

説教と講義に関する一考察 (キケロとエックハルトを手懸りに)

中 川 憲 次

はじめに

説教も講義も、聴衆を予想してなされる発話である。それは聴かれなければ意味をなさない業である。然るに、現今の大学講義室の状況は、私語が目立つなど、学生が熱心に講義に聴き入る姿は珍しくなっている。ここではその様な状況を打開する道を探るべく、ローマの政治家にして雄弁家であったキケロ⁽¹⁾と、中世の説教者であり大学教授でもあったマイスター・エックハルト⁽²⁾を中心に、他にも幾人かの著作家の言説を手懸りにして考察を進めたい。

1 「演者を見ずに講談を聴く客たち」

演芸評論家の矢野誠一氏が、2003年6月20日金曜日の朝日新聞夕刊文化欄に「すえた空気の講釈場」と題する一文を書いている。「私の『寄席』遍歴」と題されたシリーズの二回目の文章である。その一文に添えられた写真は衝撃的なものであった。それは東京上野の釈場「本牧亭」の、1954年1月のある日の様子を写したものであった。そこには、釈台を前に演じている老講釈師をそっちのけで、火鉢を間に挟んで何やら世間話をしている年寄りの客の姿が写されていた。キャプションに曰く、「演者を見ずに講談を聴く客たち」。矢野氏はいみじくも本文の末尾で、「本牧亭は年寄の社交場みたい」と書いている。この客たちは講釈師の講釈を真剣に聴くために本牧亭に通っていたのではなかったのである。彼らは講釈の内容など熟知していたであろう。彼らは社交場を必要としていたのである。そう言えば矢野氏は本文の中で岡本綺堂の『落城の譜』の次のようなくだりを引用していた。「今も昔も同じことで、講釈場の昼席などへ詰めかけている連中は、よっぽどの閑人か怠け者か、雨にふられて仕事にも出られないという人か、まあそんな手合が七分でした」。綺堂の言うような人々が集まっている本牧亭で、「演者を見ずに講談を聴く」姿があっても許されるであろう。もしこのような場面で本牧亭の講釈師が逆上して客を難詰などしたとすれば、それは野暮というものであろう。しかし、私がこの項のはじめで件の写真を見て「愕然とした」と書いたのは、1951年1月の上野・本牧亭の有様は、我が福岡女学院大学の教室に散見されるものだったからである。それでは、福岡女学院大学は岡本綺堂流に言うなら、「よっぽどの閑人か怠け者か、雨にふられて仕事にも出られないという人か、まあそん

な手合」の共同体ということになってしまう。もしそうあるべきでないなら、語っている教師をそっちのけで私語をしながら講義を聴くというようなことは、あってはならぬことである。

2 説教や講義の退屈さをめぐる言説

2.1 アロン・Ya・グレーヴィチの証言

ここで、すでに1997年の論文においても引用したことのある、アロン・Ya・グレーヴィチの証言を聞いてみたい。グレーヴィチは、その著『同時代人の見た中世ヨーロッパ』の第1章において次のように述べている。曰く、「説教で聴衆の注意をひきつけるためには、罪による滅びや魂の救済の必要に関する一般的、抽象的な教義を避けて、具体的事実や面白い筋立てを用い、同時代や過去の人物を登場させ、昔の作者や現代の目撃者が証言している実話とされる事件をひきあいに出す必要がある。このことを教会の著作家はよく理解していた。特に身近に起こった最近の出来事は、言うまでもなく、説教の例話のなかでも明らかに最も効果が上がる人気のあるプロットだった。その種の物語に対する反応は、どれも同じだった。それまで説教師の話に耳を貸さず居眠りをしたり世間話に興じたり、司祭が礼拝の終了を告げるのをじりじりと待っていた信徒たちが、急に生き生きとした注意深い聴衆に変化する。一般的で他人事だったものが突然、誰もが身近に感じるような具体的で親密なもの、想像力を刺激し、忘れることのできない新奇で生々しい出来事に転化するのである⁽³⁾」。中世の礼拝堂においても、説教者が「抽象的な教義を避けて、具体的事実や面白い筋立てを用い、同時代や過去の人物を登場させ、昔の作者や現代の目撃者が証言している実話とされる事件をひきあいに出す」というような工夫をしなければ、会衆は「司祭が礼拝の終了を告げるのをじりじりと待」っばかりだったのである。ここでは、もはや説教の退屈さは常態であったのである。

2.2 エルンスト・ユンガーの証言

エルンスト・ユンガーはその著『砂時計の書』の「書齋における砂時計」と題した項において次のように述べている。曰く、「砂時計は学者たちの必需品のひとつだった教授たちは書物や原稿とともに砂時計をたずさえて講義に出かけたのである。それは古い大学の廊下などに飾られている肖像画からも・・・推測することができ

る。⁴⁾。また、「説教壇の砂時計」と題した項においては、次のように述べている。曰く、「砂時計の第二の居城は説教壇だった。……全ての砂時計と同様に、説教壇の砂時計も、すでに説教がどれだけすすみこれからまたどれだけつづくかを具体的に示す利点をもっていた。どれだけしばしば、睡魔と戦う目が砂が終わりに近づく光景に元気づけられたことだろう。⁵⁾。「睡魔と戦う目」を生む退屈な説教が如何に多かったかを示す証言である。事程左様に西洋中世において説教の退屈さは自明の事柄だったのである。

2.3 エマーソン (Ralph Waldo Emerson=1803年—1882年) の証言

エマーソンは母校ハーバード大学神学部の卒業生を相手に語った「神学部講演」において、唾棄すべき説教壇の様子を描写している。曰く、「説教壇が形式主義者に奪い取られると、礼拝者はいつも欺むかれて、満たされぬ思いを感じてしまいます。祈りが始まると、とたんにわたしたちは畏縮してしまいます。何しろ祈りが、わたしたちを高めてくれず、打ちすえ、不快にするのです。わたしたちは体のまわりを外套で包み、聞く耳を持たぬ孤独をできる限り確保したいという気になります。以前わたしは、ある牧師の説教を開いて、もう二度と教会へなど行くのかと、矢も楯もたまらず言いたくなることがあります。人びとはただ行くのが習慣になっている場所へ行っているだけなのだ、わたしは思いました、もしそうでなければ、昼日なか礼拝堂にはいる者などひとりもいなかったはずだと。周囲は一面の吹雪でした。吹雪は現実的で、牧師は幻にすぎず、彼を見た目で、彼の背後の窓ごしに美しくふりそそぐ雪の流星を眺めると、その悲しい対照が目にしみました。結局彼がいままで生きてきたのはむだだったのです。自分が笑ったとか泣いたとか、結婚したとか恋をしたとか、賞められたり、騙されたり、くち惜しい思いをしたりしたとか、そういうことを教えてくれる言葉を、彼はひとことも持ち合わせていませんでした。たとい彼がこれまでに生活し行為したことがあったとしても、そのおかげでわたしたちが少しでも賢くなるということはなかったのです。彼の職業の主要な秘訣、つまり生活を真理に変える術を、彼は学びとっていませんでした。おのれの経験のすべてを通じてわずかひとつの事実すら、彼はまだおのれの教義のなかへとりこんではいなかったのです。この人物は確かに耕し、植えつけ、喋り、売ったり買ったりしてはきました。いろいろな書物も読みました。食べもし飲みもしました。確かに彼の頭は痛み、心臓は鼓動しています。彼は微笑もすれば悩みもします。にもかかわらず、かつて彼がともかくも生活をしたことがあると思えるふしは、それらしい暗示は、説教のどこを探しても皆無でした。現実の歴史のなかからはただの一本の線さえ引かなかったのです。本当の説教者を知ることのできる手懸りは、

そのひとが彼の生活を、——思考の火をくぐりぬけた生活を、聞いている人びとに与えるかどうかです。ところがそのできのよくない説教者のことを申しますと、彼がいっただいどうい時代の世界に生まれ合わせたのか、彼に父親がいるのか子どもがいるのか、いったい彼は財産を持っているのか貧民なのか、都会人なのか田舎者なのか、そのほか彼の生涯にまつわるどんな事実も、彼の説教からは分りませんでした。会衆の人びとが教会にやってくるということが、そもそも不思議に思えました。これほど思考とは縁もゆかりもないただの騒音のほうが気に入るとは、よほど自分たちの家が面白くないのかと思えました⁶⁾。何とも辛辣な説教批判である。ここで批判されている説教者の説教は、エマーソンをして「結局彼がいままで生きてきたのはむだだったのです (He had lived in vain.)」と慨嘆させるようなものであった。そして、エマーソンは「彼の職業の主要な秘訣、つまり生活を真理に変える術を、彼は学びとっていませんでした (The capital secret of his profession, namely, to convert life into truth, he had not learned.)」とも言っていた。それは換言すれば、「思考の火をくぐりぬけた生活を、聞いている人びとに与える (he deals out to the people his life, · life passed through the fire of thought.)」ということであった。それができていない説教などというものは、「思考とは縁もゆかりもないただの騒音 (thoughtless clamor)」だとまでエマーソンは言っていた。説教も講義もそのような「ただの騒音」に墮するとき、退屈極まりない代物であることは疑いない。

なお、エマーソンはこの講演の後、二度と母校に招かれることはなかったという。

3 キケロの古代修辞学に学ぶ

キケロの修辞学においては次の五つの手続きが要素となる。『弁論家について (de oratore)』の第1巻第31章に曰く、「いっぽう、弁論家の活動と能力は五つの要素に分類される、つまり、まず、語るべきことを発見し、次に、そうして発見したものを単に規則どおりに並べるだけではなく、重要度に応じてある種の判断も的確に配置、配列し、次いで、言論によってそれに装いと飾りを凝らし、さらに、記憶によって固め、最後に、威厳と優雅さをもって口演すること、の五要素である (cumque esset omnis oratoris vis ac facultas in quinque partis distributa, ut deberet reperire primum quid diceret, deinde inventa non solum ordine, sed etiam momento quodam atque iudicio dispensare atque componere; tum ea denique vestire atque ornare oratione; post memoria saepire; ad extremum agere cum dignitate ac venustate.) また、こういうこともわたしは聞いて知っていた。本論に入る前に、はじめに聴衆の心をこちらに引きつけ、その好意を得るようにしなければならぬ。(Etiam illa cognoram et acceperam, ante quam de re di-

ceremus, initio conciliandos eorum esse animos, qui audirent;)⁽⁷⁾」。

ところで、キケロには他に彼が19歳の頃に書いた『発想論 (De inventione)』という書物もある。その第1巻7章に曰く、「弁論術の構成要素は、大半の論者が挙げている通り、発想と配置と表現と記憶と発声からなる。発想とは、真実もしくは真実らしく思われることで主張を補強する話題を考え出すことである。配置とは、発想した話題を順番に並べ配置することである。表現とは、適切な言葉を発想した話題に適合させることである。記憶とは、発想に即して精神に題材と言葉をしっかりと刻みつけることである。発声とは、題材と言葉の威厳に即して声と体を制御することである。(partes autem eae, quas plerique dixerunt, inventio, dispositio, elocutio, memoria, pronuntiatio. Inventio est excogitatio rerum verarum aut veri similibus, quae causam probabilem reddant; dispositio est rerum inventarum in ordinem distributio; elocutio est idoneorum verborum [et sententiarum] ad inventionem accommodatio; memoria est firma animi rerum ac verborum ad inventionem perceptio; pronuntiatio est ex rerum et verborum dignitate vocis et corporis moderatio.)⁽⁸⁾」。

以上のキケロ修辞学の五つの要素を、便利なので敢えて若書きの『発想論』に依拠してまとめるなら次のようになるだろう。①inventio (創案＝発想＝着想＝構想＝材料集め)。②dispositio (配列＝主題配置＝見せ方の順序＝結構＝創案を説得的、効果的に配置しかえること)。③elocutio (表現＝叙述＝言葉にする＝文体＝措辞)。④memoria (想起＝記憶)。⑤pronuntiatio (発声＝発表)。この中で、④と⑤の順序を逆にする場合も考えられる。上記の順序では、作り上げた語るべき内容を一度記憶してから聴衆の前で語るということになる。書いたものを見ながら読むのではなく、それを記憶して聴衆に語りかけることが、上記の順序では前提されている。しかし、④と⑤の順序を逆にすると、別の展開が考えられる。その場合、集めてきた材料をよく考え抜いて並べ替えて、叙述し、その原稿を見ながら語った後、その語られた内容が聴衆の記憶に留まるかどうかの問題となってくるのである。果たして聴衆に話の内容を思い出してもらえるかどうかが重要になってくるのである。ここでは、④と⑤を入れ替えた場合の展開も視野に入れつつ、一応、元の順序で考えるものとした。

いずれにせよ、聴衆を退屈させない説教や講義をするためには、材料集めの段階がまず重要である。次に、その材料を効果的に並べ替えねばならない。そして、それらをつながりの文章にしなければならない。いくら素材がよくても、料理の仕方と、テーブルへの出し方次第で、せっかくの食材が台無しになるのと同じことが起こりうるのである。最後に、それらの言葉の構築物が自分のものになっている場合は、自ずから記憶できるであろう。覚えられない場合は、話の素材が自家薬籠中のもの

になっていない証拠である。よく料理された話は聴衆の耳をそばだたさせずにはおかないであろうし、その記憶にも留まるであろう。

4 中世の大学の学習形態に学ぶ

ヨーロッパ中世の大学の学びの形態は次のようなものであった。①lectio (講義) ②quaestio (問題提起) ③disputatio (討論) ④determinatio (裁定)。以上からも容易に分かるように、講義は単なる知識伝達的手段ではなかったのである。それは、自ずから質問を呼び、学生達の間で討論を惹き起こし、その結果としてある到達点としての真理を生み出す契機となるものだったのであって、教師が既成の真理を持っていて、それを学生に切り売りするというようなものではなかったのである。そこには、よい素材を集めてきて、それをうまく並べ替えて、何とかして聴衆の耳に快く入れようというような企みも無い。あるのは、教師の誠実な学問的努力だけである。教師は講義するとき、考え抜いた到達点を語るなのである。そこに真実があるなら、その真実は技巧を超えている。

しかし、次に引用するエウジェニオ・ガレン著『ヨーロッパの教育』の文章は、上記のヨーロッパ中世の大学の営みを裏付けつつ、その問題点をも指摘している。第1章第3項「スコラ的教育の方法」の末尾を、長くなるが引用する。

「<作家>とは、自分自身のオリジナルな主張を述べる者であり、かれらを前にして<講読者>、つまり教師がいる。講読者は、作家たちの『命題』を解明し説明する。『作家は自分の教説を述べ、講読者は人の教説を解明する』とギルベルトウス・ボレンタヌス(ジルベール・ド・ボレ)は書いている。教師はつねに講読者であり、けっして作家であってはならない。(中略)教えるとは、読み注釈することである。『講読』とはまさに読むことを意味するからだ。(中略)まさに学校、すなわち大学が、読書の技術を極度にみがきあげ、その濫用におちいる。『講読』は分類整理される。行間注釈はテキストの行間をうずめ、余白注釈は上下左右の余白をびっしりと満たす。『字義(リテラ)』すなわち用語の意味が、説明される。『本質的意味(センスス)』すなわち、論述に含まれている基本概念の意味が、解明される。テキストのうちに秘め隠されている意味が、段階を追ってますます深く突きとめられていく。(中略)意味のはっきりしない箇所では『質題』が生まれ、『討論』が起こる。きわめて精密でこみいった技術が確立されて、それが授業を制約し、規定し、完全に決定する。学則によって、使用すべき書物が科目ごとに定められ、『自分の講読しようとする書物をいくつかに区分し、取り扱おうとする諸問題を、一年間を見通して適切に順序よく整理する』ことが、すべての教師に要求される。これに反するようなことがあると、あらかじめ定められた処罰を受け

る。幾世紀にもわたって学問的生産は、<講義>すなわち<注釈>からなっていた。じつさい、文化は<スコラ的>であり、そしてこの<学校>の教育は、権威ある書物を読むことに集中し、これらの書物の字義を解明することを目ざしていた。知識の対象は人間でも世界でもなく、人間や世界について一定の書物に『書かれてある』ことにほかならない。(中略) 太陽についてじつさいに目で見ることがらについてではなく、太陽についてプトレマイオスが述べていることについて論じられ、プトレマイオスはじかの経験に優先する。同じく、権威あるプトレマイオス注釈家はプトレマイオスに優先し、その注釈家よりも注釈家の注釈家のほうが優先する。批判的知性というものはいつも根源に立ちかえり、それを理性の法廷にもちだし、そして与件とその諸解釈とを理性的に評価するものだが、ここでは(権威ある)解釈、つまり保証済み承認済みの解釈がテキストになり、いわば議論の余地のない新しい出発点になる。(中略) あらゆる探究の可能性はすでに賢者たちの著作のうちに尽くされている、とみなされていた。かくて、いまや人間精神と事物とのあいだには、テキストや注釈や注釈への注釈が山と積まれて、ますます部厚い堅固なバリケードをつくっていった。もろもろの困難な問題は、経験や生活という近道を通して解決されることは決してなかつた。ただ『質題』、分類、ことばのうちに見出されるますますもって特異な意味、といった果てしない回り道を通してのみ、解決されていた。(中略) やがてデカルトは、この隔膜に抗議して、学校での討論や設問、要するに書物の山をしりぞけ、自己のみずみずしい純粋な省察をかかげるのである⁽⁹⁾。

この最後の文章に記されているデカルトの「抗議」は正しいであろう。確かに「学校での討論や設問、要するに書物の山」が無意味な状況はあるであろう。この点を打開するために、デカルトにおけるごとき「自己のみずみずしい純粋な省察」への着目は重要である。しかし、だからと言って、中世の大学が持っていた学問の方法が全く無意味というわけではない。講義が問題提起(上記の文章では「質題」と訳されていた)を誘い、そこから討論に発展し、一応の真理に到達するという道筋は、我が大学の学問の方法としても慕わしいものであろう。講義は学生の学習意欲を高めるために、たとえば、生き活きとした連句を導く発句ような役割を果たすものたるべきである。

5 マイスター・エックハルトに学ぶ

5.1 エックハルトのドイツ語説教における講義と説教の区別

マイスター・エックハルトは1300年代にパリ大学の教授やケルン神学大学の学頭を歴任したスコラ学者であり、同時に当時の庶民に深い影響を与えた説教者であった。

それ故、エックハルトは講義の何たるかも、説教の何たるかも実践的に熟知していたといえるであろう。

エックハルトが教師として属した学校とは、1200年代末から1300年代初頭にかけてのパリ大学とケルン神学大学である。パリ大学のエックハルトは、フランス語以外の言葉を母国語とする学生に対する教師であった。ケルンでは、ケルン神学大学の学頭であると同時に、ドミニコ会修道院の院長でもあった。ドイツ語説教に *schuole* として出てくるのは、このケルン神学大学のことである。以下、当該箇所を辿ってみたい。

まず、説教第9番には次のような文章に *schuole* が出てくる。曰く、「私は学校で、知性は意志よりも高貴であるが、両者ともこの〔高い〕光に属すると述べたことがある (*Ich sprach in der schuole, daz vernunftlicheit eldeler waere dan wille, und gehoerent doch beidiu in diz licht.*)⁽¹⁰⁾」。このようにエックハルトは、ケルン神学大学で語ったことを、一般信徒を前にした説教においてためらうことなく披露しているのである。

次に説教第15番では、エックハルトは次のように言う。「私はパリの学校で、『あらゆる事柄は真に謙遜な人間において完成される』と言った (*Jch sprach ze paris in der schul, das allu ding sond volbracht werden in dem reht demutigen menschen.*)⁽¹¹⁾」。パリ大学で講義した内容を、エックハルトはドイツでの説教において披露しているのである。

また説教第16b番では、エックハルトは次のように言っている。「像はその存在をそれが派生したものから仲介なしに受け取り、そのもとのものと一つの存在をもち、同じ存在である。これで、学校で論議されている事柄について、私は述べたのではない。これは教えとして説教壇で語るのにふさわしい問題である (*Diz enist niht gesprochen von den dingen, diu man sol reden in der schuole; sunder man mac sie wol gesprechen uf dem stuole ze einer lere.*)⁽¹²⁾」。エックハルトは「説教壇で語るのにふさわしい問題」と「ふさわしくない問題」とを区別しているのである。エックハルトはガレン言うところの「学校での討論や設問、要するに書物の山」から説教壇へと当該の問題を、意識的に救い出していると言えよう。

最後に説教第22番から引用したい。エックハルト曰く、「昨日、学校で神学の碩学たちの間である問題が討議された。そこで、私は『聖書は内容が豊かであるのに、誰もその最も小さな語すら十分に理解できないのは不思議である』といった (*Ein vrage wazs gester in der schuole under grezen paffen. >Mich wundert<, sprach ich, >daz diu geschrift also vol ist, daz allerminste wort ergrunden enkan<.*)⁽¹³⁾」。まさにここで、エックハルトはガレンが言及していたデカルトの態度を先取りしている。エックハルトは「自己のみずみずしい純粋な省察」によって聖書の豊かな内容に迫り得ると、裏から語っていると言えよう。

5.2 エックハルトのドイツ語説教に見る広義の修辞学

エックハルトの説教は主題が明確である。それは、古代修辞学の「発想 (inventio)」の段階でエックハルトが力を発揮した証拠である。グレーヴィチが指摘していた中世の説教のご多分に漏れず、エックハルトの説教においても譬話が多用される。また、様々な思想家の言葉が多く引用される。それは、エックハルトが多くの書物を読んでいたことを示している。エックハルトは『離脱について』という書物の中で次のように述べている。「わたしは多くの書物を読んできた。異教の師たちの書いたものも、預言者たちのものも、旧約聖書も、新約聖書も。わたしが真剣に全力を傾けて探し求めたのは、どれが最高にして最善の徳であるか、すなわち、人を神に最もよく、最も近く結びつけ、恩寵により人を神の本来の姿と同じものにするようにできるような徳とはどのようなものであるのか、神が被造物を創造する以前、人と神との間にいかなる区別もなかったとき、神の内にあるその自分自身の原像と最も近くなるためにはどんな徳によればよいのかを捜し求めたのである。私の知性がなし得るかぎり、認識し得るかぎり、あらゆる書物を徹底的に探求した結果、私がそこに見つけたのは、純粋な離脱はあらゆる徳を凌ぐということに他ならなかった (Ich han der geschrift vil gelesu, beidiu von den heidenischen meistern und von den wissagen und von der alten und niuwen e, und han mit ernste uud mit ganzem vlize gesuochet, welhiu diu hoehste und diu beste tugent si, da mite der mensche sich ze gote allermeist und aller naehest gevuegen muge und mit der der mensde von gnaden werden muge, daz got ist von nature, und da mite der mensche aller glichest stande dem bilde, als er in gote was, in dem zwischen im und gote kein underscheit was, e daz got die creature geschuof. Und so ich alle die geschrift durchgrunde, als verre min vernunft erziugen und bekennen mac, so envinde ich niht anders, wan daz luteriu abegesiheidenheit ob allendingen si.)⁽¹⁴⁾」。中世盛期の大学の直中で、ガレンの言うようにエックハルトは正に「読み注釈する」大学教師であった。しかし、今しがた引いた『離脱について』にあったごとく、「あらゆる書物を徹底的に探求した結果」として、「純粋な離脱はあらゆる徳を凌ぐ」という独創的な見解を持つに至ったとき、エックハルトは「読み注釈する」教師から逸脱して、自身の直接の省察に従って「自分自身のオリジナルな主張を述べる者」、すなわち「<著作家>」となったのである。このように、エックハルトの inventio は、自分以外の著作家の教説の上に、自分自身のオリジナルな教説も材料として扱ったのである。ここにエックハルトの広義の修辞学の独自性がある。

次に、古代修辞学の第二段階から第五段階までを、エックハルトのドイツ語説教に当てはめて考察してみたい。まず、その「配列 (dispositio)」の妙を、ドイツ語説教第2番の一節を例にして考えてみたい。初めに聖書箇所

(ルカによる福音書10章30節)が、ラテン語とドイツ語で朗読されるのはエックハルトの説教の常である。その際、聖書の「マルタという女 (mulier quaedam, Martha nomine)」という言葉が、意図的に「女であるひとりの処女 (ein juncvrouwe, diu ein wip was)」と置き換えられる。そして、この「『処女』がイエスを迎え入れた」という主題で説教は展開する。主題はイエスを迎え入れる受容性において、人は全て処女でなければならないという点にある。続いてエックハルトは「夫婦 (eliche liute)」というイメージを登場させて、自我にとりつかれている人間の状況を露にする。しかる後、「処女」としての受容性のもたらす実りの豊かさに言及される。その後、しばらく「魂のうちの力 (ein kraft in der sele)」に言及するという脱線を敢えて犯す。そして最後に、残されていた主題である「むら=城 (castellum=burgelin)」に帰ってくる。「城」とは「魂の城」であり、この「城」において、「魂は神と等しい」と説き、「どうかわたしたちが、そのようにひとつの『城』となり、そこにイエスが登り来たり、迎え入れられ、そしてわたしたちのうちに、わたしが語った仕方でも永遠にとどまるよう、神がわたしたちを助けてくださるよう (Daz wir alsus sin ein burgelin, in dem Jesus ufgange und werde empfangen und ewicliche in uns blibe in der wise, als ich gesprochen han, des helfe und got.)⁽¹⁵⁾」と結ばれる。

この説教において、聖句の主題を二つに分け、一見脱線するように見せて、結局、本来の主題に戻ってくる手法は鮮やかである。出てくるイメージは人の意表を突くものであり、聴く者を飽きさせなかったであろう。そのことは、これらの説教がテープレコーダーもない時代に会衆のある者によって書き取られたものであることによつて証明されている。エックハルトのオリジナルの原稿が残っていないために、かえって我々は不完全ではあるが語られたままのエックハルトの説教に触れ得るのである。それは、「叙述 (elocutio)」を想像させつつ、「語り (pronuntiatio)」を示してくれているのである。上記の説教の脱線からの転換点で語られたエックハルトの言葉に、この説教の配列の確かさは明白である。エックハルト曰く、「イエスが迎え入れられたということについてはあなたがたに話した。しかし『城』とは何であるかはまだあなたがたに話をしていない。そこで、それについてこれから話をしたいと思う (Nu han ich iu geseit, daz Jesus empfangen wart; ich enhan iu aber niht geseit, waz daz burgelin si, also als ich nu dar abe sprechen wil.)⁽¹⁶⁾」。説教の進行に連れて常に戸惑いがちな聴衆へのこのような配慮は、全ての教師が学ぶべきところであろう。一見、錯綜したようなこの説教の各主題の配列は、熟慮の結果であったのである。

最後に、エックハルトが「叙述 (elocutio)」した説教を「記憶 (memoria)」して「発声 (pronuntiatio)」していたことは想像に難くない。記憶した説教を語りつつ、

当意即妙なアドリブが挿入されたことも、また想像に難くない。

5.3 エックハルトのドイツ語説教に見る狭義の修辞学

エックハルトの叙述は絢爛豪華と言えよう。特に、その比喩や譬話は絶妙である。以下にいくつか紹介しよう。

まず、ドイツ語説教第5番bの比喩及び擬人法から。「よくよくいっておくが、あなたの行ないを天国、神、あなたの永遠の至福などのために外面から行なうならば、ほんとうに間違っている。あなたはなるほど人から受け入れられるが、それは最善ではない。というわけは、実際にはかまどの火の傍らや馬小屋のなかより、内面的瞑想、敬虔、甘美な忘我、特別な恩恵に浸るほうが神を多く受けると思うならば、神をとらえて、頭にマントをかぶせて、ベンチの下に押し込むようなことをしているわけである (so tuost du niht abders dan ob du got, naemest und wundest im einen mantel umbe daz houbet und stiezest in under einen bank.)。 (中略) もし、誰かが生に向かって千年の間、なぜお前は生きてるのか、と問い続けたとすれば、生は『私は生きてるがゆえに生きてる』としか答えないであろう (Swer daz leben vragete tugent jar: war umbe labest du? Solte ez antwurten, ez sprachte niht anders wan: ich lebe dar umbe daz ich leben.)。 (17)」

次に、ドイツ語説教第12番の二つの譬話から。「創造されたすべてのものは無である。ところが、これ〔一〕はすべての被造物から遠く、無縁なのである。(中略) もし、私がほんの一瞬でもこの存在のうちにあるならば、私は自身を糞の中の蛆虫ほどにもみなさないであろう。(ich ahtete als wenic uf mich selben als eines mistwurmelins) (18)」

「もし、神のうちで一びきの蠅を掴まえるならば、自己自身のうちにある最高の天使より、神のうちにあるこの蠅のほうがずっと高貴である (Der eine vliegen nimet in gote, diu ist edeler in gote dan der hoehste engel an im selber si.)。さて、すべてのものは神のうちにあっては等しく、神御自身である。ここに、この同等性において、神はたいへん喜びを覚えて、この同等性である神御自身から、その本性、その存在を完全に注ぎ出すのである。神がこれを喜ぶさまは、まったく平らな、起伏のない、緑の野原に馬を走らせるときに似ている (Daz ist im lustlich; zeglicher wise, als der ein ros lat loufen uf einer gruenen heide.)。 (19)」

「ところで、このように神の意志に基づく人は、神と神の意志以外のものは望まない。(中略) 彼は自分自身から自由で、脱却していて、彼が受けなければならないどんなものからも自由であるに違いない。私の目が色を見なければならぬとき、目はすべての色から自由でなければならぬ。私が青い色か白い色を見るとき、色を見る私の目の見ること、すなわち、そこで見ること自体は、目で見られるものと同じである。私が神を見る目は、神

が私を見るのと同じ目である。私の目と神の目は、一つの目で、一つの視力、一つの知、一つの愛である (Sol min ouge sehen die varwe, so muoz ez ledic sin aller varwe, daz selbe, daz da sihet, daz ist daz selbe, daz da gesehen wirt mit dem ougen. Daz ouge, da inne ich got sihe, daz ist daz selbe ouge, da inne mich got sihet; min ouge und gotes ouge daz ist ein ouge und ein gesiht und ein bekennen und ein minnen.)。 (20)」

更に続いて、ドイツ語説教第22番の譬話から。「神がかつて人間のために行なった最大の善は、神が人になったことであつた。ここで、これにふさわしい物語を語ってみたい。あるところに一人の高貴な男と女がいた。この女は災難に遭い片目を失って、たいへん悲しんだ。夫が彼女のもとに来て、『妻よ、どうしてそんなに悲しむのか、目を失ったことで悲しむことはない』といった。『旦那さま、目を失ったから悲しいのではありません。そうではなくて、あなたが私を前より愛さなくなるのを恐れて悲しんでいるのです』と彼女は答えた。彼は『妻よ、私はおまえを愛している』といった。その後すぐに彼は自分の片目をくり抜き出し、妻のもとに行き、『私がおまえを愛していることを信じてもらうために、おまえと同じようになった。私にも目は一つしかない』といった。人間はこのようなもので、神が御自身の片目を抜き出そうとも、人性をもつまでは、どんなに神が人間を愛しても、人間は神をまったく信じることができない。これが『肉になった』(ヨハネによる福音書1.14) という意味である (Diz ist der mensche, der kunde gar kume glouben, daz in got so lieb hate, biz als lanc daz got im selber ein ouge uz stach und an sich nam menschliche nature. Diz ist 'vleisch worden'.)。(21)」

最後に、ドイツ語説教第48番の譬話から。「今日ここに来る道すがら、あなたがたによく理解してもらうためには、どのように説教したらよいかと考えた。そこで、わたしはひとつの比喩を思いついた。比喩をあなたがたが正しく理解することができれば、あなたがたはわたしの考えと、これまでに説教してきたわたしの全関心の根拠とを理解するであろう。その比喩とはわたしの目とこの(説教台の)木材とにかかわるものである。わたしの目は開かれているときも目であり、閉じられているときも、それは同じ目である。また、見ようと見まいと、この木材は増えもしないし減りもしない。さあ、わたしの言うことをしっかり理解していただきたい。わたしの目それ自身が一にして単純なるものであるとして、今それが開かれて、この(説教台の)木材に視線が注がれたとする、すると目も木材もそれぞれそのままであるが、しかしながら両者は、見るという働きの内では、目即木材つまり、この木材はわたしの目である、と真に言うことができるほどひとつとなる (Do ich hiute her gienc, do gedahte ich, wie ich iu also vernunftlicke gepredigete, daz ir mich wol verstuendet. Do gedahte ich ein

glichenisse, und kundet ir daz wol verstan, so verstuendet ir minnen sin und den grunt aller miner meinunge, den ich ie gepredigeteg, und was daz glichenisse von minem ougen und von dem holze: wirt min ouge ufgetan, so ist ez ein ouge; ist ez zuo, so ist ez daz selbe ouge, und durch der gesiht willen so engat dem holze weder abe noch zuo. Nu merket mich vil rehte! Geschihet aber daz, daz min ouge ein und einvaltic ist in im selben und ufgetan wirt und uf daz holz geworfen wirt mit einer angesiht, so blibet ein ieglichez, daz ez ist, und werdent doch in der wurklicheit der angesiht als ein, daz man mac gesprechen in der warheit: ouge-holz, und daz holz ist min ouge.).⁽²²⁾」

これらの比喩は、説き難き事柄を何とか説こうとする迫りに満ちていると言えよう。なお、冒頭の文章は期せずしてエックハルトの説教論になっている。説教をどうしたら「よく理解してもらえるか」にエックハルトは説教の現場に赴く道すがら、心を砕き、そのために譬を使ったのである。ただ人の関心を引き、私語や居眠りを防ぐためにするだけの譬話や物語を語ることなど、エックハルトと無縁である。

5.4 エックハルトのドイツ語説教に見る独特の修辞学

見てきた如く、エックハルトは狭義の修辞学においても、卓抜であったと言えよう。しかし、実はエックハルトの真の修辞学は以下に述べる点にあると、我々は考えるのである。

エックハルトの説教には、普通の意味での修辞学的関心に反するような言葉が散見するのである。そのような発言を、以下にいくつか紹介しよう。

まず、ドイツ語説教第2番から二箇所。

「もし、あなたがたが私と同じように認識するならば、述べていることはよく理解できるであろう。なぜかといえば、これは真実で、真理そのものが語っているからである。(Moehet ir gemerken mit meinem herzen, ir verstuendet wol, waz ich spriche; wan ez ist war und diu warheit sprichet ez selbe.).⁽²³⁾」

「私が述べたことは、真実である、このために真理を証人に呼び、私の魂を抵当に出そう (Daz ich iu geseit han, daz ist war; des setze ich iu die warheit tz einem geziugen und mine ze einem pfande.).⁽²⁴⁾」

次にドイツ語説教第52番から一箇所。

「この説教を理解しない人はこれに心を煩わすことはない。なぜなら、人がこの真理に等しくないかぎり、この説教を理解しないであろう。そのわけは、これは神の心から仲介なしに出た覆われていない真理であるからである。(Wer dise rede niht enverstat, der enbekumber sin herze niht da mite. Wan als lange der mensche niht glich enist dirre warheit, als lange ensol er diese rede niht verstan; wan diz ist ein unbedahtiu warheit, diu da komen ist uz dem herzen gotes ane mittel.).⁽²⁵⁾」

これらは、一見すると聴衆を無視するような言葉である。分かる者には分かる、分からない者には分からない、分からなくても気にすることは無い、と。しかし実際面から見て、これらの言葉は実に効果的だったに違いない。すなわち、これらの言葉は全て構造的に反語法である。なぜなら、これらの言葉の示すところは、深い省察の結果としての真理に対するエックハルトの確信だからである。この確信が聴衆を十分に惹き付けたであろう。だからこそ、オリジナル原稿が残っていないにもかかわらず、テープレコーダーも無かった時代の聞き書き説教の原稿が、相当数復元されるという結果となっているのである。

ここで、我々の講義という営みに戻って考えたい。一回の講義を計画する段階で、既に勝負は決まる。古代修辞学における *inventio* の段階が全てであると言ってもよからう。教師の「発想」に全てはかかっているのである。エックハルトの発想が如何に豊かであったかは、本稿で紹介した例だけでも十分に納得していただけるであろう。エックハルトの説教の豊かな展開は、発想の豊かさに尽きるとしても過言ではあるまい。その発想の基礎となっているのは、エックハルトの日々の省察の到達点である。エックハルトは、パリ大学の教授職にあったとき以来、「学の教師 (Lesemeister)」として有名であった。しかし、ラインラントにおいて説教活動を展開したとき、エックハルトは「生の教師 (Lebemeister)」と呼ばれるようになった。ここから察せられることは、エックハルトの省察が説教の準備段階の発想において、学から生への発展を見たということである。エックハルトこそ、エマーソン言うところの「生活を真理に変える術」を持っている説教者だったのである。だからこそ、エックハルトの一言一語が、その実、揺るぐことのない確信に基礎付けられていることを聴衆に悟らしめたのであろう。そのような確信に満ちた発想に続くものとしてのみ、エックハルトの説教の、古代修辞学の言うところの *elocutio* (記述) の段階における華麗さも意味を持つのである。換言すれば、それは、確信する真理を如何に伝えるかにエックハルトが心を砕いた結果の必然的な華麗さだったのである。

結び

われわれは、上野本牧亭の「演者を見ずに講談を聴く客たち」と似たものとして、現今の大学生の講義を受ける姿勢を捉えた上で、そのような状況を打開する講義のあり方について考えてきた。そのさい、講義と類似した発話形態である説教に着目し、アローン・Ya・グレイヴィチやエルンスト・ユンガーの証言を聞いた。時代を異にするにもかかわらず、彼らが問題視していたのは、眠気を誘う説教の存在であった。グレイヴィチは、中世の説教者たちが会衆を眠らせないために「具体的事実や面白い筋立てを用い、同時代や過去の人物を登場させ、

昔の作者や現代の目撃者が証言している実話とされる事件をひきあいに出す」という方策を講じていたと論じていた。他方エマーソンは、説教が聴衆の耳目をそばだたせるためには、説教者自身が「生活を真理に変える術を学び取り、「思考の火をくぐりぬけた生活」をこそ語るべきだと言っていた。

われわれは続いて、キケロの紹介する古代修辞学における五つの手続きを一瞥したが、それに照らすなら、グレーヴィチやエマーソンの言うところは、ひとえに「発想 (inventio)」の段階に関係していた。中世の説教者は、「発想」の段階で会衆の興味を引くであろう題材を集めることに腐心したのである。またエマーソンは、生活が思考の火を潜り抜けて真理となったような言葉を「発想」の段階で用意すべきだと言っていたと考えられよう。

そして、われわれは特にマイスター・エックハルトの説教に着目してきた。エックハルトは広義の修辞学において、まず、その発想到独自性があった。様々な作家の思想を引用しつつ、エックハルトは自分自身が作家でもあったのである。エックハルトは、本稿の5.1の項で触れておいたように、大学で講義した独創的な見解を説教でも語ったのである。

さらにエックハルトの狭義の修辞学は、彼がその独創的な見解の説きがたき見解を説き尽くそうとすると、絢爛と咲き乱れるごとくであった。

以上の要素が相俟ってエックハルトの説教が会衆の心を捉えたであろうことは、頷けよう。エックハルトが「学の教師」と同時に「生の教師」と当時の民衆から呼ばれたことも納得されることである。なぜエックハルトの説教は、それほどまでに聴く者の心を捉えたのであろうか。その根本的な理由は、聴衆に対する愛であろう。エックハルトは、己が生涯をかけて到達した宗教的真理の極致を、たとえば愛するベギンたちという聴衆に理解させるべく腐心したのである。エックハルトにとって、聴衆は単に山を賑わわせる枯れ木ではなかったのである。

われわれが熱心に講義に聴き入らない学生の多数存在する現今の大学講義室の状況を打破するために、まず必要なことは、学問への愛、そして同時に学生への愛が自分にあるかどうかを今更ながら自分に問うことであろう。そして、同時に、教える事柄について単に出来合いの教科書を読み上げ、説明するだけの講義に留まることなく、たとえ僅かでも世界のどこにも無い独創的な真理を語るべきであろう。そのような講義こそが、学生の中に質題を呼び起こし、学問への道をひらくのである。そのような真理を、学生への限りなき愛に基づいて語ろうとするとき、狭義の修辞学は自ずから後に続くであろう。

昨今、大学においても教育的努力に重点が置かれるべきだとする議論が喧しい。そのような議論の出発点には、教育と研究に関する自明的な二元論的区別が存在する。しかし、たとえばエックハルトの説教は、彼の研究の成果が核になっていた。その成果を、エックハルトは教育

的効果抜群の狭義の修辞学的方法を用いて語っていたのである。事程左様に、学問と教育とは、有機的に結びついている。高等学校までならいざ知らず、大学においては研究しない教師など存在し得ないはずである。

こう考えてくると、学生の耳目をひらく講義は、教師の学問と学生に対する限りなき愛に基づいてこそ、ようやく可能になるということになるであろう。

註

- 1 Marcus Tullius Cicero (前106年-前43年)
- 2 Meister Eckhart (1260年頃-1327年)
- 3 アロン・Ya. グレーヴィチ著、中沢敦夫訳『同時代人の見た中世ヨーロッパ——13世紀の例話——』、平凡社、1995年、42頁-43頁
- 4 エルンスト・ユンガー著、今村孝訳『砂時計の書』、講談社、1990年、163頁
- 5 同上、165頁
- 6 エマーソン著、酒本雅之訳『エマーソン論文集』岩波書店、1972年、172頁-174頁。なお、英文テキストよりの部分引用は、インターネットの以下のサイトによった。Emerson, Ralph Waldo. Nature: Addresses and Lectures (1849) Electronic Text Center, University of Virginia Library.
- 7 キケロ著・大西英文訳『キケロ選集 (第6巻)』、岩波書店、2000年、頁。なお、ラテン語の引用は、インターネットの以下のサイトによった。De Oratore Liber Primus by Cicero Ch. 22-42 Latin Text.
- 8 キケロ著・片山英男訳『キケロ選集 (第7巻)』、岩波書店、1999年、頁。なおラテン語の引用は、インターネットの以下のサイトによった。Cicero De Inventione liber I.
- 9 エウジェニオ・ガレン著・近藤恒一訳『ヨーロッパの教育——ルネサンスとヒューマニズム——』、サイマル出版会、1974年、51頁-55頁。
- 10 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 1. Die Deutschen und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1986, 152頁9-10行目。なお、以下のエックハルトの説教の翻訳は、全て次の書の当該箇所によった。『キリスト教神秘主義著作集6』
- 11 同上、247頁4-6行目
- 12 同上、270頁、6-8行目
- 13 同上、381頁、3行目
- 14 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 5. Die Deutschen und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1987, 400頁、1-6行目。
- 15 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 1. Die Deutschen und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1986, 45頁1-3行目。
- 16 同上、38頁6-7行目。
- 17 同上、90頁12行目-91頁6行目。
- 18 同上、198頁4-5行目。
- 19 同上、199頁5-200頁3行目。
- 20 同上、200頁14行目-201頁8行目。
- 21 同上、377頁4行目-379頁1行目。
- 22 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 2. Die Deutschen und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1988, 416頁1行目-417頁1行目。
- 23 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 1. Die Deutschen und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1986, 41頁5-7行目。
- 24 同上、44頁6-7行目。
- 25 Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 2. Die Deutschen

und Lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1988, 506頁 1 –
3行目。